

# 令和6年度「人権教育研究指定校事業」指定校事業報告書

委託先（ 広島県 ）

## 1. 調査研究のテーマ、概要

調査研究のテーマ	自他を認め協働する力を育成する 人権教育の推進に関する研究
----------	----------------------------------

### ○調査研究のテーマを設定した目的

令和5年6月に閣議決定された教育振興基本計画において、基本的な方針の一つとして「誰一人取り残されず、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進」が示され、学校教育においても、生徒が自分の価値とともに他者の価値を認め、尊重し、共生することができるよう人権教育を推進することが重要となってくる。

このような中、広島県では、「広島県 教育に関する大綱」において、身に付けさせる資質・能力の一つとして「多様な価値観を受容し、多様な個性・能力を生かし、他者と協働しながら新たな価値を創造していく力の育成」を掲げており、人権教育においても、自他の価値を認め他者と協働する力の育成に向けた取組を推進している。多様な価値観の受容については、様々な場面で多様なルーツを持つ人々と出会う中で、自分とは異なる他者の個性や考え方、その背景にある伝統、文化などを柔軟に受け入れていくことが重要であり、県立学校においては、海外の学校と姉妹校提携を行い、海外の生徒や現地の様々な人々との相互交流を行っているところである。

令和5年度には、県立高等学校1校を指定校として本事業に取り組み、「アイヌの人々」を事例として、多様性一般の理解を目指した研究に取り組んできた。アイヌ文化参加体験型学習や地域に在住する外国籍の方との調理実習など、他文化に関する多様な学習機会を設けることで、生徒の多様性への理解や異なる文化等を肯定的に受け止めようとする態度を養うことができるという点が明らかになった。一方で、そういった態度を生かして、生徒が様々な人々と関わり、お互いを尊重しながら学校生活を送るという点については課題があり、さらに取組を進めていく必要がある。

これらのことから、令和5年度の成果と課題を踏まえ、令和6年度は人権課題「外国人」を重点課題に設定し、「外国人」を事例として、多様な他者と関わる機会を多く設定する。それらの活動を通して、自分とは異なる考え方や価値観に触れ、対話を通して異なる価値観を柔軟に受け入れることが可能になるとともに、自分の価値についても認め、自分を表現することができるようになることを考える。そして、生徒が多様な価値観を受け入れるとともに自分を表現することができるようになることは、お互いを尊重しながら学校生活を送ることにつながると考えられる。

よって、目指す生徒の姿を「自他を認め、尊重し、協働して物事を進め、社会に参画しようとする生徒」とし、その育成のための人権教育の在り方を明らかにすることを目的として、本研究テーマを設定した。

○調査研究の概要

- 「外国人」を重点課題とし、これを事例として多様な価値観に対する理解の定着を目指す。
- 特別活動（主に学校行事）を柱に教科横断的な視点で教育活動を推進することで、他者に対する理解や協働しようとする態度の育成を図る。
- 他者の感性や価値観に触れる機会と自分の感性や価値観を表現する機会を、教育活動全体で多く設定し、生徒の自己肯定感を高める。
- これらの実践を通して、他者を認め、尊重し、協働して物事を進め、社会に参画しようとする生徒を育成する。

## 2. 基本情報

### 研究指定校の概要

○学校名

広島県立日彰館高等学校

○これまでの研究指定等の状況

○学級数

各学年2学級（計6学級）

○児童生徒数

全数：221人（令和7年2月14日現在）

○URL

<https://www.nitsushokan-h.hiroshima-c.ed.jp/>

○指定理由

当該校は、令和3年度から5年度までの学校経営計画において、中期経営目標の一つに「他者を認め、尊重し、協働してものごとを前に進めていく生徒を育成する」として、学校行事を中心に合意形成力を培う指導を行ってきた。

文化祭や体育祭などの学校行事においては、生徒主体に計画・運営を行うことで協働性、合意形成力を培うよう取り組み、生徒アンケートによる「学校行事の満足度」は3年間平均88%と肯定的評価が高い状況にあるものの、実際の生活場面では、SNSでのトラブルや生徒指導事案など、他者の気持ちを考えた行動ができていない状況もある。これまで、生徒に協働の場を与え生じたトラブルを生徒が乗り越えることで協働する力が育成されると捉えた指導を行ってきたが、教員の表面的な対応にとどまりトラブルの解決に至っていない面もある。

これらのことから、当該校においては、生徒に協働の場を与えるだけでなく、人権教育の視点から他者に対する理解や受容しようとする態度の育成を進めていく取組の必要性を感じている。

また、当該校は姉妹校提携をしている台湾の学校への希望者による研修旅行を実施したり、留学生との交流会である「吉舎おもてなしプラン」を開催したりする等、国際交流を重視している。加えて、当該校が設置されている三次市でも、様々な国際交流を通じた国際感覚豊かなひとづくりが推進されている。

したがって、当該校を指定することで、本県が目指す『外国人』を事例として、自他を認め、尊重し、協働して物事を進め、社会に参画しようとする生徒を育成する人権教育

の在り方」を研究することができると考え、当該校を指定した。

### 3. 取り組んだ人権課題について

取り組んだ人権課題（該当するものに○印。複数選択可。うち、最も主要な人権課題1つに◎をつけること。）※人権教育研究推進事業公募要領（別紙）「2. 事業の内容」を必ず確認すること。

①子供	○
②女性	
③高齢者	○
④障害者	○
⑤ <u>同和問題</u>	
⑥ <u>アイヌの人々</u>	
⑦外国人	◎
⑧-1 HIV感染者等	
⑧-2 <u>ハンセン病患者等</u>	
⑨刑を終えて出所した人	
⑩犯罪被害者等	
⑪インターネットによる人権侵害	○
⑫北朝鮮当局による拉致問題等	
⑬性的指向、性自認	
⑭その他（            ）	

## 4. 調査研究の内容等

### ○調査研究の内容

自他を認め、尊重し、協働して物事を進め、社会に参画しようとする生徒を育成するため、重点課題を「外国人」とし、特別活動を中心とした教科横断的な視点で人権教育の在り方について研究を行う。特別活動では、「多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする」ことが目標に掲げられ、特別活動で育成を目指す資質・能力の3つの視点として、「人間関係形成」「自己実現」「社会参画」が挙げられている。このことから、目指す生徒の姿に向けた人権教育の在り方について研究を進めるに当たり、研究する際の切り口として特別活動に焦点を当てて研究を行う必要があると考える。

### ○実施方法

本事業を推進するに当たって、自他を認め、尊重し、協働して物事を進め、社会に参画しようとする生徒の育成を目指し、指定校と連携して、次の調査研究に取り組んだ。

○ 「外国人」等を事例として、多様な価値観に対する理解の定着を目指した授業を実施した。

⇒総合的な学習の時間や特別活動において、「外国人」を学習内容に含んだ研究授業を実施し、言語・文化・歴史・価値観などの複数の視点から多様な価値観の在り方を理解させた。

⇒第1学年においては、留学生との交流会である「吉舎おもてなしプラン」を実施した。取組の前には、留学生をおもてなしする内容や方法を、留学生の実態等を踏まえて考える活動を行い、他の言語や文化について理解を深めた。

○ 特別活動（主に学校行事）を柱に教科横断的な視点で教育活動を推進することで、自他に対する理解や協働しようとする態度の育成に取り組んだ。

⇒6月の文化祭は地域と協働して実施した。地域人材を活用し、文化祭に向けゲストティーチャーを招いて、地域における高齢者や障害者の現状や高齢者や障害者等との共生について講演していただくことで、社会における協働について理解することができた。また、ゲストティーチャーが、講演会だけでなく、文化祭においても一緒に取り組むことで、社会における協働についてより理解が深まった。

⇒入学から月日が経つにつれて、人間関係が深まる一方でSNSでのトラブルが起こりやすくなるため、9月には、NTTドコモから講師を招いて「SNSによる人権侵害」の学習を行うことで、自他を認め、尊重する態度の育成につなげた。実施に当たっては、公民科の学習内容と関連付けた学習となるよう工夫した。

⇒留学生との交流会である「吉舎おもてなしプラン」に向けて、JICAの講師による出前講座を行い、言語・文化・歴史・価値観などの複数の視点から多様性の在り方を理

解させた。「吉舎おもてなしプラン」当日には、実際に留学生との交流の中で文化の違い等を感じるにより、異文化への理解が深まった。また、総合的な探究の時間で考えた「吉舎の宝」を留学生に対してどのように紹介すればよいかといった視点で計画するなど、地理歴史科や外国語科、総合的な探究の時間などに関連付けて取り組んだ。

○他者の感性や価値観に触れる機会と自分の感性や価値観を表現する機会を、教育活動全体で多く設定した。

⇒ミュージカル劇団によるワークショップを実施し、生徒の表現力を向上させた。このワークショップに学校全体で取り組むことで、学校全体で表現力の向上を意識した取組ができたと考える。

⇒学年内発表会及び学校全体での学習成果発表会を実施し、総合的な探究の時間の個人・グループ探究の成果報告の発表を通して表現力を育成した。校内だけでなく、外部への発表により取組に新たな価値が加わったと考える。

⇒各教科等において、表現力の育成につながる授業づくりを進めた。「表現力の向上」を学校全体の目標とし、全ての教育活動において表現力の育成を意識した取組を進めた。

○検証・評価・改善・普及

「日彰館高校の目指す生徒像への到達度調査」として、人権教育的視点 15 項目について、「とても・まあまあ・ふつう・すこし・ない」の 5 段階で回答するアンケートを、事前【令和 6 年 6 月 10 日（月）】と事後【令和 6 年 12 月 19 日（木）】に実施し、結果を比較・分析した。

・相手と協力して計画を進める力について

アンケート項目の「⑤協働することの重要性を理解している」が 12.1 ポイント、「⑥他の人の喜びや悲しみに共感しようとしている」が 9.1 ポイント増加した。また、日高祭（文化祭）において高まった項目として、「⑤協働することの重要性を理解している」を 53.6%の生徒が、体育祭において高まった項目として、「⑤協働することの重要性を理解している」を 66.1%の生徒が、「⑥他の人の喜びや悲しみに共感しようとしている」を 53.7%の生徒が肯定的な回答をしていることから、「相手と協力して計画を進める力」が高まったといえる。PDCA サイクルを利用したことで、生徒が計画的に取り組んだことや自分の役割が明確になったことが、多くの生徒が達成感や充実感を感じることに繋がったと考える。

・地域社会と共存する力（理解）について

アンケート項目の「③世界には多様な文化や価値観があることを知っている」が 6.1 ポイント増加した。また、吉舎おもてなしプランにおいて高まった項目として、「③世界には多様な文化や価値観があることを知っている」に対して 83.9%の生徒が肯定的な回答をしていることから、「地域社会と共存することの意義を理解する力」が高まっ

たと考える。

・他者の気持ちを考えた行動について

行事による達成感や充実感の高まりからか、別室指導の件数は3件と昨年度より9件減少した。SNSの指導は10件と昨年度より2件減少した。

今後の取組について

・失敗を恐れずに挑戦する力について

事後アンケート結果から、「⑦友達や周囲の人から認められていると思う」が51.1%、「⑬自分の考えを積極的に伝えることができる」が50.0%と他の項目と比較すると到達度が低い。教職員や生徒等の他者から見れば、「もっと自信を持てばよいのに」や「挑戦すれば成功するのに」という場面が多くあることから、生徒同士の他者評価を利用し、自己肯定感を高めることにつなげたい。

・地域社会と共存する力（貢献）について

事後アンケート結果から、「⑩地域や社会をよくするために何をすべきかを考えている」が54.7%と他の項目と比較すると到達度が低い。地域の方や地元の保育園児、地元企業が本校行事に参加してくださっていること等、既存の取組を確認することで、地域社会に貢献していることを認識できると考えられる。

今年度の研究結果を活用し、引き続き3大行事への実践を利用して、「他者を認め、尊重し、協働して物事を進め、社会における自らの役割を自覚し行動する生徒」の育成に取り組むたい。



## 6. 推進体制（都道府県・指定都市教育委員会を含む）

